

日本軍のサワンナケート進駐

—サワンナケートにおける仏印武力処理とその後を中心に—

The invasion of the Japanese Army in Savannakhet, Laos

—Focus on the Japanese *coup de force* in Savannakhet and the ensuing months—

菊池 陽子

Yoko Kikuchi

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

This paper examines the Japanese *coup de force* in Savannakhet, a city in southern Laos, on March 9, 1945 and the ensuing months with reference to available Japanese documents. These documents show that the Japanese army disarmed the French Indochina army in Savannakhet and chased the French soldiers out of the city. The Japanese army ruled Savannakhet the same as before. They had no intention of changing the administration and the personnel. However, some Lao and Vietnamese organizations prepared for the independence movement during this period of Japanese occupation in World War II.

キーワード：ラオス，サワンナケート，日本軍，仏印武力処理

Keywords: Laos, Savannakhet, The Japanese Army, The Japanese *coup de force* in Indochina

はじめに

第二次世界大戦末期に日本が単独でラオスを支配していた時期は短期間であったが、ラオス史にとって歴史的な転換点であると認識されている。しかしながら、史資料の制



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

約から研究がほとんどなされておらず、各地域の分析を積み重ねてラオスの全体像を明らかにしていく必要がある¹。すでに拙稿において、日本軍による仏印武力処理及びその後の状況の一端をルアンパバーン²、ラオス南部のパクセ³、中南部のタケク⁴について検証してきた。

本稿では、前稿と同じ問題意識から、ラオス南部のサワンナケートに限定して、武力処理の状況や日本軍の支配について可能な限り明らかにしたい。この時期のサワンナケートに関しては、ガンが、1930年から54年までのラオスの政治闘争を主題とした書籍の中で数ページにわたって言及している⁵。サワンナケートに特化して言及しているのは、管見の限りガンのみである。ガンは主にフランスのエクサンプロバンスにある海外文書館所蔵史料の「カムセーン報告」を利用して、この間のサワンナケートについて記述している。ガンによれば、カムセーンはサワンナケートのイサラ側のチャオムアン⁶であったが、フランスへの情報提供者になった人物であり、彼が1945年3月9日から1946年3月17日までのサワンナケートの政治状況を報告したのが上記報告で、1946年4月7日に作成されている⁷。上記報告書は日本がサワンナケートを占領した時から、フランスが第二次世界大戦後にサワンナケートを再占領するまでの時期⁸の報告であり、再占領後にまとめられている。筆者は残念ながら、この「カムセーン報告」を探し出せておらず、未見であるため断定はできないが、当時のフランスの関心、つまり、サワンナケートにおいて誰が親仏で再占領後の統治にとって信用できる協力者であるかということに伝えるための報告書であるとの印象を受ける。そのため、対日協力者については報告されているが、武力処理自体や日本の各部隊の動きなどについての報告はなされていない。

フランス側の史料に依拠しているガンに対して、筆者が主として依拠した史資料は旧日本軍人へのインタビュー、軍人の回想録や連隊史を中心とする日本側の史資料である。限定的な考察となるが、本稿では、適宜ガンの記述も参照しながら、日本側から見たサワンナケートの武力処理とその後を明らかにしたい。

I. フランス植民地下のサワンナケート

サワンナケート⁹はメコン川に面したラオス南部の都市である。1893年、ラオスがフ

ランスの植民地になると、フランスはラオス北部の行政の中心地をルアンパバーン、南部の行政の中心地をサワンナケートとした。フランスは、1899年にラオスの行政の中心地をビエンチャンに移したが¹⁰、サワンナケートには理事官府が置かれ、フランスのラオス統治の中心地のひとつであった¹¹。

フランスは、1904年にラオバオ峠を越えてベトナム中部とサワンナケートを結ぶ9号線植民地道路の建設を始めた。建設が中断された時期もあったが、1926年に完成し、7号線や12号線とともにラオスとベトナムをつなぐ主要な道路となった。1911年から建設を開始したメコン川沿いにラオスの南北を結ぶ13号線と9号線が交差する都市がサワンナケートであった¹²。しかし、日本軍がサワンナケートに進駐した1945年当時、タケク以北の13号線の状態はかなり悪かったようで、日本の部隊はタケク以北への移動には船を使用している¹³。1945年4月に道路建設のためサワンナケートからパクサン（タケク以北のメコン川沿いの町）に移動した歩兵第85連隊第2中隊員、角田敏男の回想録によると、

タケック（マ）までは未舗装ではあるがしっかりとした道路だったけれども、それから先はジャングルを車が通れる幅に木を切り倒しただけの草ぼうぼうの道を進み、（中略）所々に泥濘もあり積み荷のダイナマイトを下ろして担いで超えたり、泥濘に嵌まったトラックを押ししたりしながらの行進は四百kmほどの道のりを五日がかりの前進だった¹⁴。

とある。この時期、サワンナケートは、ラオスの行政の中心地であるビエンチャンや王都のルアンパバーンとのアクセスよりも、9号線やタケク経由の12号線でベトナム中部とのアクセスが容易な地であった。

1943年の統計では、サワンナケートの人口は5500人で、そのうちラオス人が850人（約16%）、ベトナム人が4000人（約72%）、中国人が450人（約8%）、その他200人（約4%）となっている¹⁵。フランス植民地期のラオスでは、都市の人口の大半はベトナム人であったが¹⁶、サワンナケートにおいてはベトナム人が人口の7割強を占めており、タケクに次いでベトナム人人口の多い都市であった。こうした人口構成は、日本軍がサワンナケートに進駐した1945年3月時点でもほぼ同じであったと考えてよいであ

ろう。

II. サワンナケートの武力処理

サワンナケートにおいて、1945年3月9日、武力処理（明号作戦）を実行に移した部隊は、歩兵第83連隊第3大隊第11中隊の1小隊と歩兵第85連隊第1大隊主力であった¹⁷。以下、武力処理の準備、当日、その後の状況を主として歩兵第83連隊の北山俊男の回想録¹⁸とインタビュー¹⁹、歩兵第85連隊の連隊史²⁰、及び同第2中隊の角田敏男の回想録²¹によってまとめる。

1. 武力処理の準備

歩兵第83連隊第11中隊の1小隊はサバナケット（マ）警備隊と呼ばれ、北山俊男少尉を警備隊長とし、兵員68名²²からなる部隊（以下、北山小隊と呼ぶ）であった。1945年2月8日、歩兵第83連隊第3大隊の緒方廣業大隊長から明号作戦の密命を受けて編成されたのが北山小隊で、2月11日に大隊本部のあったベトナムのビンからサワンナケートに向けて出発した。4台のトラックで出発し、ナーペーで一泊、タケクで二泊し、2月15日にサワンナケートに到着した²³。

サワンナケートに到着すると、北山は仏印軍連絡将校、ケンカネン中尉を訪ね、共同して警備にあたることになった旨を伝達し、宿舎の世話を依頼した。大きな民家を借りて兵舎とし、情報の収集と作戦準備に入った²⁴。サワンナケート到着前、ラオスやサワンナケート、同地の仏印軍に関する情報、基礎知識は何もなかった。日本人経営のホテルや商店、タケクやルアンパバーンにはあった昭和通商²⁵もなかった。したがって、現地で、フランス人の司令官や現地の住民から情報を集めるしかなかった。フランス人とのやり取りは稲田兵長が英語に堪能でフランス語もできたので、通訳をお願いした。現地の住民とのやり取りに関しては、連隊本部がたどたどしいが日本語がわかるベトナム人をつけてくれたので、その人を通して情報を得た²⁶。

北山が、稲田を通訳に、毎日、ケンカネン中尉のもとに通い、仏印軍の現状を聞き出す一方、兵隊は交代で町に出て、安南²⁷（マ）の芝居小屋を見に行ったり、華僑²⁸の飲食店へ出入りしたりして住民からの情報を収集した。そのなかで、ラオス独立党（マ）の

青年と知り合いになった。彼を通して、フランス人将校の住宅、人数、兵器の状況や管理状況、兵士の士気、保安隊の状況などを知ることができた。さらに、住民の協力を得るために兵を町に出して、住民との接触を図ることに努めた²⁹。北山部隊の後にサワンナケートに到着した歩兵第 85 連隊第 1 大隊主力の兵も、昼間は毎日、メコン川へ水浴に行き、町の人々と一緒になって茶色に濁る川で遊び、その帰りにはそのまま町をぶらつき、仏印軍の将校宿舎や兵営の様子を探り、頭の中に叩き込んだという³⁰。

歩兵第 85 連隊第 1 大隊主力は、八重樫長次郎少佐を大隊長とする部隊（以下、八重樫大隊と呼ぶ）で、回想録によって若干異なるが、北山小隊の後、2 月下旬にサワンナケートに到着した³¹。兵力は約 240 名であった³²。兵にはサワンナケート到着まで同地に来た目的と任務については知らされず、当然、現地の情報も事前には何も持っていなかった³³。北山小隊と同様に八重樫大隊も武力処理の直前に仏印軍の情報を現地で購入し、即実行という状況であったといえる。そして、情報収集には現地住民の協力があったことがわかる。ラオス独立党と北山が記憶している組織の青年については、氏名や年齢、ラオス人かベトナム人かも記憶にはないそうであるが、この組織を通しての情報が、「以後の戦闘、掃討、警備に大いに寄与」³⁴することとなったそうであるから、日本軍にとって有益で確かな情報であったのであろう。正式名称はわからないものの、通訳によって独立と翻訳されたのであるから、現地の組織側が、フランスからの独立を目指す組織であるということを知らせなくてもよいと認識しており、それによって日本軍から不利益を被ることはないと考えていたのではないであろうか。仏印軍の情報を入手したかった日本軍とラオスの独立を目指していた現地組織との間に、共通の敵はフランスという点で、双方の利害が一致したのであろう。

日本敗戦後、ラオスのフランスからの独立を求めるラオ・イサラ（自由ラオス）運動で主導的な役割を果たしたウン・サナニコーンは、サワンナケートで青年活動のリーダー、かつ日本のスパイであったのはプーミー・ノーサワン³⁵であったと述べている³⁶。また、カムセーン報告でもプーミーとその兄弟が日本の協力者であるとされている³⁷。日本軍はプーミーを通してフランス軍の情報を得ていた可能性があるが、プーミーは、反日レジスタンスに参加した後、ラオ・イサラ運動に加わったともいわれており³⁸、実際のところは不明である。また、前述のカムセーン報告では、日本の警察に雇われ、出自を偽ってサワンナケートに 1 年以上滞在していた朝鮮人諜報員がいたことが述べられ

ている³⁹が、管見の限り、日本側の史資料ではそういった人物は言及されていない。そもそも隠匿事項であるので、史資料がないことをもって日本が派遣した諜報員がいなかったとは言い切れず詳細は不明であるが、北山小隊も八重樫大隊もサワンナケートに到着して現地で収集した情報が、武力処理の準備にとって有益であったといえる。

北山小隊が収集した情報によればサワンナケートの仏印軍は総兵力約 1600 名⁴⁰、八重樫大隊によれば 2000 名⁴¹であった。日本側は両隊を合わせても約 300 名で、圧倒的に兵力が劣っており、北山によれば、武力処理を成功させるには「奇襲攻撃より道なし」⁴²であった。

2. 武力処理の実施

3 月 9 日夜⁴³、無線で武力処理開始の連絡を受けると、北山小隊はフランス軍将校、ダスク中佐の宿舎を急襲した。ダスク中佐を連行して仏印軍の兵営であったドンモイ兵営に向かった。通訳に降伏を呼びかけさせると安南兵は投降したが、フランス人下士官は抵抗したため、八重樫大隊の支援を受け応戦し、約 3 時間で武力処理に成功した⁴⁴。

八重樫大隊は、市街中央の保安隊、仏印総督府⁴⁵ (マ)、仏印軍司令官ダスク中佐官舎、警察隊 (マ)、将校宿舎、兵器修理所、メコン川渡船所などの要所、市街地南東方 2 キロ地点に位置するドンモイ兵営の各所に分かれて攻撃を開始した。ドンモイ兵営には北山小隊と 4 台のトラックに分乗して向かい、約 1 時間半で武力処理は終了した。サワンナケート市内では、ドンモイ兵営よりも早く武力処理完了の信号弾が上がっていた⁴⁶。北山の回想録と第 85 連隊史では、武力処理開始時間や戦闘終了までの時間に差異があるが、サワンナケートにおける武力処理は短時間で成功した。戦闘は当初日本側が考えていたよりも手早く片付き、犠牲者も最小限⁴⁷であった。

武力処理が終わると、ダスク中佐以下の仏印軍将校、下士官および保安隊員約 50 名を捕虜として市内の保安隊兵営に収容した⁴⁸。フランス人の捕虜に関しては、しばらくは兵営に収容した。午前と午後の 2 回の散歩の時間に捕虜と家族が面会することに関して日本兵は大目に見ており、家族は兵営の周りの有刺鉄線の外から差し入れを持ってきたり、洗濯した衣服を持ってきたりしていた⁴⁹。北山の記憶によれば、後日、連隊本部からフランス人の軍人はタケク経由でハノイに移送するように連絡があり、まず軍人をタケクへ送った。その後、軍人の家族や医師なども含めてフランス人全員をハノイに送

るように指示がありタケクに送ったので、サワンナケート市内にはフランス人がいなくなつた⁵⁰。フランス人理事官などの行政官は、武力処理直後は軟禁されていたようである⁵¹が、おそらく、軍人の後にハノイに移送されたと考えられる。ただし、将校4名の行方が分からなかった⁵²と述べられているように、捕虜にならずに逃走したフランス人将校や兵もいた。現地人の保安隊員は武装解除して故郷に返した⁵³。

翌10日の朝のサワンナケートの状況については、角田の回想と第85連隊史の記述がほぼ一致している。双方に、昨日まで仏印軍の兵士が歩哨に立っていた兵舎の門に日本兵が立っているのを見てサワンナケートの人々は驚いたが、八重樫大隊長の「我々は昨晩フランス軍の武装を解除した。だが日本がフランスに代わって統治するのではない。安南は貴方たち安南人のものであり、フランスのものでも日本のものでもない」との説明に驚きの声は歓声に変わったと記されている⁵⁴。

カムセーン報告では、10日の朝、日本軍によってサワンナケートが占領された時⁵⁵に、ベトナム人コミュニティーと中国人の多くは日の丸を掲げて日本への協力を示した一方で、ラオス人は家の中にこもっていたことが述べられている⁵⁶。北山の回想録にも10日の正午頃、華僑が歓迎の日の丸を持って祝宴を開くからと招待に来たことが述べられている⁵⁷ので、カムセーン報告の性格を差し引いても、武力処理後のサワンナケートで、新たな支配者である日本軍にすぐに反応を示したのは、ベトナム人、中国人であったと言える。前述の八重樫大隊長の言葉が、ラオスでありながら「安南は安南人のもの」とベトナム人向けになっているのも、サワンナケートの民族別人口比率でベトナム人が7割強を占めていたことに加え、ベトナム人の対日姿勢も大きく関係していたであろう。

3. フランス兵の掃討

サワンナケート市内の武力処理後、日本軍にとって重要であったのは、サワンナケートの治安維持（次のIII章で言及）と逃走したフランス兵の掃討、サワンナケート郊外のフランス兵営の武装解除であった。北山小隊は、9号線に沿ってセノの飛行場からセポン、ベトナムとの国境のラオバオまで行っており、敵を追走し、各兵営で保安隊の武装解除を行った。ほとんどの場合、北山小隊の到着前、フランス兵はすでに逃走していたが、セポンの兵営を夜襲して軍事物資をサワンナケートに運ぶ途中、ドンヘンでは敵ゲリラによる橋梁爆破によって日本側に死傷者が出た。ラオバオでは捕虜にした安南兵か

らフランス人将校 4 名を長とする約 60 名の敵兵がケンコークにいるとの情報を得て、ケンコークに向かったが、すでに撤退した後であった⁵⁸。

ドンヘンに生まれ育った N 氏は、フランス兵が逃げた後に日本兵がフランス兵を追ってドンヘンに来たこと、フランス兵が橋を燃やして逃げて行ったので、橋から落ちて死んでしまった日本兵がいたことが噂になっていたことを記憶している。おそらく北山の回想にあるのと同じ出来事であろう。N 氏によると、ドンヘンの村人は、日本兵が来ることを聞くと怖くて森に逃げ隠れていた⁵⁹。

八重樫大隊もセノの飛行場やセポンに向かったが、戦闘はなく、集積されていたフランス軍の物資をサワンナケートへ集めるのが主な作業で、配属されていた自動車小隊がサワンナケートとセポンの間を往復して任にあたった。4 月初め、サムヌアーパクサン間の道路建設が開始されるのに伴い、その作業に従事するため、八重樫大隊はタケク経由でメコン川岸を北上し、パクサンへ移動した⁶⁰。

八重樫大隊が移動した後も、フランス兵の追走は続いた。住民から、フランス兵が隠れている、逃げるフランス兵に豚を取られた、落下傘で物資が落とされたなどの情報が日々入ってきており、その情報を判断するのは隊長である北山の仕事であり、現地の警察に任せたり、追走部隊を出したりして対応した。サワンナケートを空にしておくことはできなかったのも、主力をサワンナケートにおいて、追走部隊を入れ替わり立ち替わり出した⁶¹。5 月 10 日には、独立歩兵第 672 大隊第 1 中隊及び鉄砲隊の一部がサワンナケート付近に移動し、警備、討伐を担当するようになった⁶²。

しかしながら、日本軍は、敗戦までの間に、逃亡したフランス兵やそれを助けていた現地住民を掌握することはできなかった。北山は、住民から残敵の情報がもたらされ、掃討作戦を行っても、武力処理前に確認したフランス人将校 4 名は不明で、掃討がまだまだ続いたことを述べている⁶³。サワンナケート市内や 9 号線のような重要な地点には日本軍は検問を設け人や物の動きを管理していた⁶⁴そうであるが、市内や幹線から外れた地域にまでは支配が及んでいなかった。9 号線から外れた村在住の S 氏は、父親は村に残ったが、自分は森に隠れており、そこから 5、6 キロ離れた森の中にフランス兵が隠れていたことを知っていたが、日本兵が怖くてその情報は教えなかったという⁶⁵。S 氏は当時、7、8 歳の子供であったため森に隠れていたとも言えるが、前述の N 氏の証言にもあるように、村落に居住していたラオス人のなかには、日本兵とフランス兵の戦闘

を避け、森に隠れていた人がかなりいたのではないかと推察できる。

カムセーン報告には、4月に、彼自身も含め、ラオス人の役人が日本の警察（マ）（おそらく憲兵であると考えられる-筆者）に逮捕されたことが述べられている。逮捕された1人のルアム・インシエンマイ⁶⁶は、当時、知事であり、ラオス人の役人に自由フランスへの協力を促していたことなどが逮捕の理由であるとされている。その他に、名前を挙げて、自由フランスに協力したラオス人レジスタンスがいたことも報告されている⁶⁷。このように積極的にフランスに協力したラオス人がいた一方で、前述のプーミーのように日本のスパイ、協力者とみなされていたラオス人もいた。しかしながら、サワンナケート郊外の村落に居住していたラオス人は、日本兵とフランス兵の戦闘を前にして、どちらの側に協力するのでも激しく抵抗するのでもなく、どちらにも関わらないで身を隠すという選択をした人が多くいたと考えられる。それは彼らが意図していなかったかもしれないが、日本とフランスに対する無関与の抵抗とでもいうべきことであったといえるであろう。

III. 日本軍によるサワンナケート支配

3月9日、サワンナケートの武力処理を終えた日本軍にとって、前述のフランス兵の追走とともに重要であったのはサワンナケート市内の治安維持であった。フランスの行政官が一扫された後のサワンナケートには現地人行政官が残され、そのトップはラオス人であった。前述のように3月10日、八重樫は「日本がフランスに代わって統治するのではない」と言ったとされているが、実際は日本軍による統治であったと言ってよいであろう。北山によると、八重樫大隊がサワンナケートを離れた後、警備隊長として治安維持の責任者となったのは北山であった⁶⁸。

武力処理後、日本軍は治安維持のため、当初は軍政を布告した。現省長（マ）（県知事（チャオクウェーン）のことであると考えられる-筆者）を中心に現地の華僑、ラオス人、安南人の代表による三者合同治安維持会を組織し、治安維持にあたらせた⁶⁹。北山は、当時のサワンナケートには、華僑、ベトナム人、ラオス人、インド人がいたが、インド人は人数が非常に少なく、接触がなかった。したがって、サワンナケートでは3つの民族を押さえておけばよかった。皆協力的であったと記憶している⁷⁰。カムセーン報

告では、日本軍当局は3月10日に「security commission」を設立し、その長にはサワンナケートのベトナム人リーダーが就任した⁷¹とある。前述の三者合同治安維持会のことであると考えられるが、北山によると、省長を中心に組織化されており、ラオス人とベトナム人のどちらが長であったのかははっきりしない。ただ、省長が組織の長となったと考える方が自然であろう。

さらに、北山は日本軍の主たる任務は治安維持で、行政的なことはラオス人に任せていたと述べている。ただし、部下の曹長、伍長を置いて連絡事務所を作り、現地の役人と連絡を取り、行政の円滑な遂行を計ることに努めた。連絡事務所にはベトナム人の通訳がいて、その人が日本軍と現地の行政の仲介をしていた⁷²。カムセーン報告では、見かけ上、日本軍当局と密接な関係を築いていたのはベトナム人コミュニティーで、日本軍の情報元もベトナム人であったと報告されている⁷³。ウンは、サワンナケートのベトナム人は日本人のスパイであり、我々のような自由ラオスにとって危険な存在であった⁷⁴と述べている。日本軍にとっては、人口の7割強を占めるベトナム人と良好な関係を築くことは市内の治安維持にとって欠かせなかったはずで、上記、治安維持会や連絡事務所を通してのベトナム人とのつながりは、サワンナケートを支配する上で重要であったであろう。結果的に、日本軍がサワンナケートに新設した組織でのベトナム人との関係が、日本軍とベトナム人コミュニティーの密接な関係とラオス人の目には映ったのではないであろうか。しかしながら、ラオス人が、フランス兵と行動をともにした人、日本軍のスパイとみなされていた人、ウンのように自由タイとともに活動し、日本軍からもフランス兵からも距離を置いていた人と多様であったように、ラオス人から見ればすべて親日ベトナム人とひとくくりにされる人々も、推測の域を出ないが、実際は多様な存在であったのではないであろうか。

この軍政期間に、北山は、フランス人の行動制限、フランス軍人を捕虜とし収容所に収容、ベトナム兵の帰郷、及び希望者は将来の保安隊員として省（マ）が採用し教育は日本軍が行う⁷⁵、交通の制限、物価の安定（食糧、日用品の確保と必要により密輸の黙認。隠匿物資の放出）、武器の供出と警察の強化、市場の再開と賭博場の許可などを主として行った⁷⁶。北山は、サワンナケートの経済を握っていたのは華僑であり、華僑の会長が物資の流通の件でよく嘆願にきた。日本軍の検問を通過できるように書類を書いて便宜を図ったこともあり、北山自身は日常的に一番接触が多かったのは華僑であった

と記憶している⁷⁷。

第二次世界大戦直後にサワンナケートに入ったアメリカの OSS（戦略情報局）は、サワンナケート在住フランス人からの情報として、日本が支配していた時期にサワンナケートには 4 社の日系商社があったと報告している。日本による武力処理とともに営業を開始した大南公司、大南公司と一緒にやってきた Nitinan（マ）、7 月 27 日に来て 8 月 15 日に撤退してしまった Maruyei（マ）、そして、中国人の商社である Chieu Hoa-Thong-Thuong（マ）であった。大南公司は主として木材を扱い、Nitinan は砂糖、たばこ、コーヒー、米、木材を扱っていたが、日本人とベトナム人とのみ商売をして、ラオス人やフランス人には物を売らなかった。Maruyei はラオスの主要な都市に支店を持っていた会社で主として食糧を扱っていた。Chieu Hoa-Thong-Thuong はサワンナケートの中国人商人が集まって作った商業連合で、生地や小間物、食糧などを扱っており、日本人とだけ商売をしていた⁷⁸（そのため日系商社とみなされていると考える-筆者）。北山はサワンナケートに進駐した時、民間の日本人はおらず、日系のホテルや商店などもなかったと記憶している⁷⁹。これら日系商社の存在は確かめようがないが、日系の商社があったとしても営業を始めたばかりでは十分な商売ができず、日本人相手の Chieu Hoa-Thong-Thuong という中国人の商社の力が強かったのではないであろうか。

5 月 1 日、所期の目的を達すると、北山は軍政を廃止し、治安維持会を解散、省長による平常の政治にもどした⁸⁰。

サワンナケートに進駐していた間、北山はラオス側から招待された歓迎会、新年の行事に参加し、小学校の視察を行った。歓迎会は八重樫大隊と交代して警備にあたるようになった頃、省長が開いてラオス料理とラオス女性の踊りでもてなしてくれた⁸¹。5 月初めのラオスの新年の際には、省長からの招待を受け、3 名の日本兵ともに寺に向かった。寺の境内は着飾った住民であふれており、正装した省長が迎えてくれた。席に座ると僧侶の読経が始まった。寺での儀式が終わると、省長が北山の横に立って境内にいったいばいの住民に対して演説した。その後、ラオス人倶楽部（マ）に案内されて祈りを捧げてもらおうと、僧侶、省長、名士の順に北山の右手首に木綿の糸を結びつけて合掌して拝んだ。省長は、健康と幸運を祈る儀式であると説明してくれた⁸²。この木綿の糸を手首に結ぶ儀式は、バシースークワンと呼ばれ、現在も客人を歓迎する時や人生の節目に幸運や健康を祈って行われ、参加者を温かな気持ちにさせてくれる儀式である。歓迎会や

新年の行事に招待され、こうした心温まる儀式を催してくれたことは、日本軍にとって、ラオス人は協力的であると認識させる重要な要因であったと考える。

小学校視察に関しては、北山は、6月頃に連絡事務所を通して、ラオス側から打診された。出かけていくと、ベトナム人の先生⁸³が生徒（おそらくラオス人とベトナム人）に日本語を教えていた。学校で日本語を教えるように言ったことはなかったのに、視察に来るからたまたま教えたのか、いつも教えているのかはわからなかったが、日本軍には宣撫要員はおらず、大使館関係者もサワンナケートにはいなかったのに、教育面で強制したことは何もなかった。日本語の雑誌や新聞なども発行するような余裕はなかった⁸⁴そうである。ラオス側の対日協力を印象付ける演出であったかもしれないが、こうした予期せぬ出来事は、現地の人々の協力と日本軍の下で治安が良好に維持されていることを示し、日本軍には好意的に捉えられたであろう。

サワンナケートでは、前述のカムセーン報告にあったように、フランス側についたり日本軍に逮捕されたりしたラオス人行政官もいたものの、行政においてはラオス人、経済においては中国人、治安維持においてはベトナム人の協力を得、彼らに任せていたからこそ、日本軍は少ない人数で支配し、フランス兵を追走することもできたといえる。作戦のために、現地の行政は現地の人々に任せるという方針は、第38軍のインドシナにおける武力処理後の統治方針に合致していた。土橋勇逸第38軍司令官は、統治方針を「無為の為」であり、軍の作戦準備を妨害しないように臨機応変の対応をする⁸⁵としていた。

北山は7月中旬、中隊復帰の命を受けてビエンチャンに向かったが、さらにタケクへの移動命令が出てタケクに着いたところでデング熱にかかった。回復すると再び移動命令でビエンチャンへ行ったらところで敗戦となった⁸⁶。日本の敗戦時、歩兵第83連隊第3大隊はルアンパバーンに大隊本部を置き、ムアンサイ、ビエンチャン、タケク、ビン、ドンホイに分散して配備されていた。大隊はラオスから撤退し、ビンに集結することになり、第一次集結地をビエンチャン、第二次集結地をサワンナケートとし、9号線を通ってベトナムの海岸線に出て、約3週間かけてビンに集結した⁸⁷。

第二次集結地となったサワンナケートでは、9月初旬、撤退のために、一度に多くの日本兵が集結することになった。宿舎に困り、北山が、省長に手配をお願いすると、学校、寺院、教会を提供してくれ、便宜をはかってくれた。さらに、省長は、華僑の人々

ともに将校一同を招待して宴を開いてくれたそうで、敗戦兵となった日本兵への温かい対応に感じ入った⁸⁸という。サワンナケートには3泊して、9月10日ころ、ビンに到着した⁸⁹。7月2日からタイへの移動のため、ベトナムから9号線を西に向かっていた歩兵第86連隊⁹⁰は、サワンナケート付近で終戦の報告を受け、第2大隊を除き、サワンナケートから対岸のムクダハンに渡り、タイのウボンに集結した⁹¹。サワンナケート付近の警備、討伐を担当していた独立歩兵第672大隊第1中隊及び鉄砲隊の一部は9月10日にダナンに移動した⁹²。したがって、敗戦後しばらくは、集結地へ移動する日本兵が入れ替わりサワンナケートにやってきたが、9月中旬にはサワンナケートから日本兵が姿を消したといえる。

IV. 日本降伏後のサワンナケート

1945年9月初旬、歩兵第83連隊第3大隊がサワンナケートに結集して、アンナン山脈横断に向けての準備をしていた時に、連隊から輸送のための車両を送れないため、「機関銃、大砲および弾薬はメコン川に放棄するも可」との連絡を受けた。とはいえ、他日接收されるものとは知りながら、兵器を川に捨てることは機関銃将兵にとっては許しえないことであり、力尽きて倒れるまで人力搬送する決意であった⁹³。第3大隊は武器を集結地のビンまで携行しようとしたことがわかるが、日本の敗戦後、フランスのラオス復帰阻止に向けての活動を開始したラオス人やベトナム人は、日本軍の武器を必要としていた。

日本側の記録では、日本支配下のサワンナケートにおけるラオス独立の動きは、ラオス独立を目指す人がいたということくらいしか明らかにならないが、ウンはメコン川を挟んだタイとラオスの両岸で自由タイと連携しながら活動を行っていた⁹⁴。現ラオス人民民主共和国成立時の首相で、ラオス革命の指導者であったカイソーン・ポムウィハーンについての文献では、カイソーンは1945年4月末に勉強を中断してハノイからサワンナケートに戻ると、愛国ための宣伝活動を開始した。その時期のサワンナケートには、彼の活動だけではなく、日本敗戦までの短期間の間に、日本から権力を奪取し、ラオスを独立させようとする愛国勢力や革命勢力が次々と生まれたことが述べられている⁹⁵。日本軍に感知されずに水面下で、ラオス人、ベトナム人が独立に向けての活動を行って

いた。

そうしたラオスの独立を目指す諸勢力にとって、日本降伏後の敵はフランスであった。ラオス側の複数の文献によると、1945年8月31日になって、日本側は銃を120丁と弾薬を多数サワンナケートの住民に譲渡した。それによって、サワンナケート人民武装隊が結成された⁹⁶ということが述べられている。ウンは、日本人と親しく、信頼されていたベトナム人が日本人から武器をもらっていたと述べている⁹⁷。北山は、ラオス人やベトナム人は拳銃を欲しがっており、協力してくれたラオス人に拳銃を2丁あげたという⁹⁸。

日本側がラオス側に銃を120丁供与したことの真偽、事実であったとしたらどの部隊の武器がサワンナケートの住民（ラオス人またはベトナム人）の手に渡ったのかは定かではない。しかし、OSSも、サワンナケートにおいて、日本は武器を現地住民に売り、弾薬をメコン川に投げ入れたと報告⁹⁹しているので、日本軍は可能な範囲で武器をサワンナケートの住民に譲渡（あるいは販売）し、日本軍の武器の一部は住民の手に渡ったと考えられる。そして、自前の武器を持たないラオスの独立を求める諸勢力にとっては、フランスの再占領を阻止するために武器が必要であり、日本軍の武器は、当時、最も簡単に手に入れることのできる唯一の武器であった。

日本軍が去った後のサワンナケートでは、ウンは、ベトナム人がラオス人の統治に従うことを約束し、ベトナム人との協力関係が成立したために自身がサワンナケートの統治権を掌握したと述べている¹⁰⁰。一方、ラオス側の文献では日本敗北の機を捉えてベトナム人指導者のチャン・ドゥック・ビンとラオス人指導者のカイソーンとシーサナ・シーサーンが8月23日に日本側に面会に行き、サワンナケートの統治権力を移譲された¹⁰¹、あるいは、ウンの動きに関しては言及せずにラオス人とベトナム人の武装勢力の働きの下にサワンナケートが維持されるようになったことが述べられている¹⁰²。また、9月9日、サワンナケート再占領のために市街の北と南から攻撃してきたフランス兵とラオスの武装勢力が戦い、北からのフランス兵は撤退させたものの、南からのフランス兵はラオス側、日本側、フランス側の責任者で話し合いを行った後に撤退に応じたことが述べられている¹⁰³。これが事実であるとするならば、敗戦後も日本軍は、サワンナケートから撤退するまで、治安維持の役割を果たしていたと推察できる。

当時のサワンナケートにおいて、ラオスの独立を求める諸勢力間の状況やそれぞれの

関係については、記録を残している主体によって様々に語られており、日本軍やフランス兵との関係にしても、実際、どのようであったのかは、現時点の史資料状況では全体を俯瞰して論じることは困難である。ここでは主な記述を挙げたにすぎず、当該時期のさらなる研究が必要である。ただ、日本が去った後のサワンナケートでは、権力の空白期を捉えて多様な勢力が表に出て活動し始めたとはいえるであろう。

おわりに

限られた史資料からの考察で、明らかになっていない部分が多いことは否めないが、仏印武力処理後のサワンナケートについて、以下のようなことが言えるであろう。日本軍は1945年3月9日、サワンナケートの武力処理に成功し、市内を掌握すると、逃亡したフランス兵の追走や市内から離れたフランス軍兵営の武装解除を進めながら、治安維持のために当初は軍政を敷いた。ラオス人、ベトナム人、中国人からなる三者合同治安維持会を組織し、行政を円滑に進めるために、現地役人との連絡機関として連絡事務所を設立した。フランス人捕虜の収容や移送、ベトナム兵の帰郷などが終わり、物価が安定し、物資も流通するようになり、市内の治安が安定すると、軍政を廃止し、治安維持会を解散して、現地のラオス人行政官を中心とする政治に戻した。この間、日本軍と現地住民や行政との仲介役としてはベトナム人が大きな役割を担っており、経済は中国人に頼っていたと考えられる。

日本軍は、日本軍進駐前の現地の行政をそのまま利用してサワンナケートの統治にあたらせており、土橋が「無為の為」と述べていたように、現地の行政の改変や社会構造の変革などの意図を持たず、基本的には現状維持であった。日本軍にとっては、戦争遂行、作戦の継続が重要であった。したがって、フランス植民地期、ラオスはルアンパバーン王国が保護国で、その他の地域がフランスの直轄領であったが、こうしたフランスが作った植民地の枠組みも日本軍はそのまま継承した。1945年4月8日、ルアンパバーン王国が「独立」を宣言するが、「独立」はルアンパバーン王国のみで、ラオス全土には及ばなかった。サワンナケートは、フランスに代わって日本が、フランスの作った現地の統治機構や人材をそのまま利用して統治する地であった。

しかし、旧支配者であったフランス人が一掃されたこと、日本軍が現地の行政にはあまり関与しなかったことで、サワンナケートのラオス人やベトナム人の独立を目指す組

織が生まれ、成長し、活動が活発化する余地が生じたと考えられる。旧支配者に代わってサワンナケートにやってきた日本軍は、人数も少なく、現地の事情にも精通していなかった。新たに生じた状況に対応して、諸組織の活動が開始されたのであろう。第二次世界大戦後のサワンナケートで表面化する諸組織の独立へ向けての活動が、日本軍の支配下で準備されていたといえる。諸組織の活動内容や組織間の関係など、明らかにしたい課題は多々あるが、筆者はまだ、それを論じるに足る史資料を十分に持ち合わせていない。今後の研究課題としたい。

謝辞：本稿執筆にあたっては、資料の提供並びにインタビューに応じてくださった北山俊男氏、角田敏男氏、史料を提供して下さった立川京一先生、サワンナケートでインタビューに応じて下さったルアム・インシシエンマイ氏をはじめとするラオスの方々、インタビュー時にご協力いただいたブンタウィー・ソーサムパン先生（Dr. Bounthavy Sosamphanh）に大変お世話になりました。ここにお礼申し上げます。なお本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）課題番号 25243007 平成 25～29 年度「第二次世界大戦期日本・仏印・ベトナム関係研究の集大成と新たな地平」（代表：白石昌也早稲田大学教授（現名誉教授））の研究成果の一部です。

注

¹ 菊池 2019a : 100-101

² 菊池 2019a : 100-117

³ 菊池 2019b : 48-62

⁴ 菊池 2020 : 287-300

⁵ Gunn 1988 : 119-123

⁶ イサラとはラオス語で自由の意味で、第二次世界大戦後、ラオスの独立を求める勢力をまとめてイサラと呼んだ。チャオムアンとは郡長、あるいは市長の意味。

⁷ Gunn 1988 : 119

⁸ 1946年3月18日にフランスはサワンナケートを再占領した。（Kasuang 2000 : 733）

⁹ サワンナケートはフランスの植民地時代から県名としても使用されているが、本稿ではサワンナケート県の中心都市の名称として使用する。

¹⁰ Kasuang 2000 : 525

¹¹ Stuart-Fox 2008 : 1

¹² Kasuang 2000 : 560

-
- ¹³ 平野 1986 : 621、632、676
- ¹⁴ 角田 1999 : 29
- ¹⁵ Stuart-Fox 2008 : 408 民族別統計であるので、Lao をラオス人ではなくラオ人とした方が適切であるかもしれないが、本稿では、ラオス人に統一する。したがって、本稿で使用しているラオス人は、ラオス国民という意味ではなく、タイ系ラオ人の意味で使用している。
- ¹⁶ Stuart-Fox 2008 : 408 1943 年の同じ統計によると、ラオスの主要都市（ビエンチャン、ルアンパバーン、タケク、サワンナケート、パクセ、シェンクワン）のうち、ルアンパバーン以外は、ベトナム人人口が約 6 割から 8 割を占めている。
- ¹⁷ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 613-614
- ¹⁸ 北山俊男. 2001. 『あの日 あの時』(私家版)
- ¹⁹ 2015 年 8 月 29 日、石川県能美市にて実施。
- ²⁰ 平野安巳刊行責任. 藤掛寅七編集責任. 1986. 『軍旗のもとに 歩兵第八十五聯隊史』歩兵第八十五聯隊史刊行会 (非売品)
- ²¹ 角田敏男. 1993. 『孫たちに伝える おじいちゃんの従軍記』(私家版)
- ²² 回想録の別の箇所(北山 2001 : 115) では 37 名、インタビュー時の記憶では約 40 名から 60 名程度。
- ²³ 北山 2001 : 41-43
- ²⁴ 同上 43
- ²⁵ タケクの昭和通商に関しては、菊池 2020 : 289-290 を参照。
- ²⁶ 北山氏とのインタビューより。
- ²⁷ 以下、日本側の資料内で使用されている「安南」はベトナムとせず、そのまま使用する。
- ²⁸ 以下、日本側の資料内で使用されている「華僑」はそのまま使用する。
- ²⁹ 北山 2001 : 136-137
- ³⁰ 角田 1993 : 103-104
- ³¹ 平野 1986 : 578 によると、1945 年 2 月 19 日にハノイを出て、21 日にサワンナケート着。角田 1993 : 102-103 によると、2 月 25 日にハノイを出て、28 日にサワンナケート着。北山の回想録では、3 月 5 日にハノイ発、3 月 9 日未明にサワンナケート着となっている(北山 2001 : 44-45) が、本稿では、歩兵第 85 連隊員の記述に従う。
- ³² 平野 1986 : 573
- ³³ 角田 1993 : 102-103
- ³⁴ 北山 2001 : 137
- ³⁵ プーミー・ノーサワンは、ラオス王国において、第一次連合政府崩壊後に右派軍人としてサワンナケートを拠点に絶大な権力を持っていたが、1965 年に失脚してタイに亡命した。(Stuart-Fox 2008 : 258-259)
- ³⁶ Oun 1975 : 7
- ³⁷ Gunn 1988 : 121
- ³⁸ Stuart-Fox 2008 : 258
- ³⁹ Gunn 1988 : 119
- ⁴⁰ 北山 2001 : 115
- ⁴¹ 平野 1986 : 573 総兵力 800 名との記憶もある(平野 1986 : 580)。
- ⁴² 北山 2001 : 44
- ⁴³ 北山によれば 21 時(北山 2001 : 127)、角田によれば 23 時(角田 1993 : 104)、そ

-
- の他、歩兵第 85 連隊史では、21 時過ぎ（平野 1986 : 582）、22 時過ぎ（同 572）との記述もある。
- 44 北山 2001 : 127
- 45 連隊史には仏印総督府とあるが、サワンナケートにあった理事官府のことであると思われる。
- 46 平野 1986 : 572
- 47 角田 1993 : 104
- 48 平野 1986 : 573
- 49 角田 1993 : 105
- 50 北山氏とのインタビューより。ただし、サワンナケートの全フランス人が本当に移送されていなくなったのかは不明。
- 51 平野 1986 : 573
- 52 山口 1989 : 37
- 53 北山氏とのインタビューより。
- 54 角田 1993 : 104-105、平野 1986 : 573
- 55 カムセーン報告では、しのはら（漢字不明）中尉に率いられた日本軍となっているが、日本側の史資料ではしのはら中尉という人物は見当たらない。
- 56 Gunn 1988 : 119
- 57 北山 2001 : 128
- 58 同上 45-47
- 59 N 氏とのインタビューより。N 氏（女性）はドンヘン村生まれ。2019 年 8 月 5 日のインタビュー時には 95 歳であると語っていた。
- 60 角田 1993 : 105-107
- 61 北山氏とのインタビューより。
- 62 厚生省援護局 1961 : 533
- 63 北山 2001 : 139-140
- 64 北山氏とのインタビューより。
- 65 S 氏とのインタビューより。S 氏（男性）はノーラムチャン村生まれ。2019 年 8 月 5 日のインタビュー時には 82 歳であると語っていた。
- 66 2014 年 8 月 15 日、サワンナケート県カイソーン・ポムウィハーン郡の自宅で実施したルアム・インシシエンマイ氏（1914 年生まれ）へのインタビューによれば、1945 年当時はサワンナケート県カンタブリー郡のチャオムアンであった。日本軍がサワンナケートに来た後、しばらくは日本兵と一緒に仕事をしてしたが、日本兵はベトナム人を通訳に使用しており、コミュニケーションが困難であったし、自分を疑ったので、心変わりし、逃げてフランス兵と一緒に行動したと語った。日本軍に逮捕されたことは語らなかったなので、真偽については不明である。
- 67 Gunn 1988 : 121-122
- 68 北山 2001 : 47
- 69 同上
- 70 北山氏とのインタビューより。
- 71 Gunn 1988 : 119
- 72 北山氏とのインタビューより。
- 73 Gunn 1988 : 120
- 74 Oun 1975 : 16

-
- ⁷⁵ タケクの本兵の回想録に現地人兵補についての記載があることを拙稿で指摘した（菊池 2020 : 298）が、将来の保安隊要員とは兵補のことであったのであろうか。タケクとサワンナケートでは、現地の兵を使って日本軍の兵力を補うという発想の下に同じようなことが行われたのかもしれない。
- ⁷⁶ 北山 2001 : 48
- ⁷⁷ 北山氏とのインタビューより。
- ⁷⁸ Fonds DEUVE : G14-16 Laos 197
- ⁷⁹ 北山氏とのインタビューより。
- ⁸⁰ 北山 2001 : 48
- ⁸¹ 北山 2001 : 116
- ⁸² 同上 138-139
- ⁸³ 北山によると、ベトナム人かラオス人かは服装で見分けがつかない。（インタビューより）
- ⁸⁴ 北山氏とのインタビューより。
- ⁸⁵ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 680
- ⁸⁶ 北山 2001 : 140-142 移動の理由は本人には明らかにされていなかった。
- ⁸⁷ 緒方 1982 : 614-616
- ⁸⁸ 北山 2001 : 142
- ⁸⁹ 同上 49
- ⁹⁰ JACAR. Ref.C112122452600
- ⁹¹ 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 1973 : 549
- ⁹² 厚生省援護局 1961 : 533
- ⁹³ 緒方 1982 : 615
- ⁹⁴ Oun 1975 : 6-20
- ⁹⁵ Vivan 2012 : 44-46
- ⁹⁶ Sisana 1991 : 27、HongphimkhwaengSavannakhet 1995 : 24、Vivan 2012 : 50、Khammi 2013 : 76 どの文献の記述もほぼ一致している。1991 年発行の文献はカイゾーンと行動をともにしたシーサナ・シーサーンが記述しているので、ほかの文献はこれを参照したのではないかと考えられる。
- ⁹⁷ Oun 1975 : 23
- ⁹⁸ 北山氏とのインタビューより。
- ⁹⁹ Fonds DEUVE : G14-16 Laos 197
- ¹⁰⁰ Oun 1975 : 23-25
- ¹⁰¹ HongphimkhwaengSavannakhet 1995 : 24
- ¹⁰² Sisana 1991 : 27
- ¹⁰³ 同上 27-28、Vivan 2012 : 51-52

参考文献

緒方廣業編. 1982. 『追想 歩兵第八十三聯隊』（非売品）

菊池陽子. 2019a. 「日本軍のルアンパバーン進駐」. 東京外国語大学東南アジア地域ユニット『東京外大 東南アジア学』No.24, pp.100-117

- 2019b. 「日本軍のラオス南部進駐—仏印武力処理後のパクセを中心に—」. 東京外国語大学東南アジア地域ユニット『東京外大 東南アジア学』No.25. pp.48-62
2020. 「日本軍のタケク進駐—タケクにおける仏印武力処理とその後を中心に—」. 東京外国語大学『東京外国語大学論集』第100号. pp.287-300
- 北山俊男. 2001. 『あの日 あの時』(私家版)
- 角田敏男. 1993. 『孫たちに伝える おじいちゃんの従軍記』(私家版)
1999. 『思い出すままに』(私家版)
- 平野安巳刊行責任. 藤掛寅七編集責任. 1986. 『軍旗のもとに 歩兵第八十五聯隊史』歩兵第八十五聯隊史刊行会(非売品)
- 防衛庁防衛研究所戦史室. 1969. 『戦史叢書 シッタタン・明号作戦』朝雲新聞社
- 山口千里編集. 1989. 『照隅録—歩兵第八十三聯隊第十一中隊中隊誌—』八三戦友会(十一中隊)本部長 高瀬吉平発行(会員領布)
- 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 中新井光雄 代表. 1973. 『歩兵第八十六聯隊史』(限定出版)
- Gunn. Geoffrey C. 1988. *Political Struggles in Laos(1930-1954)* Duang Kamol. Bangkok HongphimkhwaengSavannakhet. 1995. *Mounsuatousou philaathan khwaeng Savannakhet Savannakhet* (『サワンナケート県の勇敢な闘争の伝統』)
- Kasuang thalengkaw lae watthanatham. 2000. *Pawatsat law(dukdamban-pacouban)* Hongphimhaenglat. Vientiane (『ラオス史(古代から現代)』)
- Khammi Nawtuayang. 2013. *Pathan Kayson Phomvihan nyunnyongkhongtua younay phalakitpativatannyingnyay khongpasasonlaobandaphawtalotpay* Vientiane (『諸民族からなるラオス人民の偉大な革命の使命を維持し続けているカイソン・ポムウィハーン主席』)
- Oun Sananikone. Translated by John B. Murdoch and 3264. 1975. *Lao Issara: The Memoires of Oun Sananikone* Data paper: Number100. Southeast Asia Program. Department of Asian Studies. Cornell University. Ithaca, New York
- Sisana Sisan. 1991. “Phuconghakphakditokanpativat lae topasason”(「革命と人民に忠実な人」) in Khanakammakan vithanyasatsangkhomhaengspplao. *Kayson Phomvihan loukhhongpasason* Vientiane (『カイソン・ポムウィハーン 人民の子』)

Stuart-Fox, Martin. 2008. *Historical Dictionary of Laos* The Scarecrow Press, Inc. Lanham, Maryland • Toronto • Plymouth, UK

Vivan Canthakhot. 2012. *Sivit lae phalakitpativat khong pathan Kayson Phomvihhan Samnakphim lae camnaipumhaenglat*. Vientiane (『カイソーン・ポムウィハーン主席の生涯と革命の使命』)

(未公刊史料・文献)

厚生省援護局. 1961. 『タイ・仏印方面部隊略歴』 国立国会図書館

Fonds DEUVE. Série G(Avant Guerre-Après Guerre)14-16 Laos197. Mémorial de Caen. Service des Archives et de la Documentation

JACAR (アジア歴史資料センター). Ref.C112122452600 (タイ. 仏印方面部隊略歴) 防衛省防衛研究所